

現実世界を抜け出そう とする少年の話

モルモット☆

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

誰も現実世界とはかけ離れた体験をしてみたいと思つたことがあるだろう。

ここにも一人、そんなことを思いつづげる学生がいた。

思い付きで始めた処女作です。また投稿は1か月に1回あればいいペースだと思います。亀投稿でもお許しください…!!

よろしくお願ひします
!!!

目次

第1話	1
第2話	4
第3話	7
第4話	11
第5話	16
第6話	21
第7話	26
第8話	30
第9話	37
第10話	41
第11話	45
第12話	50

第13話

第1話

誰もが1度は現実世界と乖離した世界に行ってみたいと思ったことがあるだろう。これは、ごく平凡の高校生が異世界への扉を開こうと奮闘する物語である。

P i p p i p i : : . . . ん : : 眠っ

眠い目をこすりながら時計を見ると「7:00」と表示している。
制服、よし。荷物、よし。身だしなみ、よし。ハンカチ、よし。

最低限これだけは整える。だっていつ異世界に行くかわかんないもんな!

ハンカチの個別確認は大事だ。いつどこで素敵なお嬢さんが怪我しているかわかんないし。

母は海外で仕事をしているから基本は家に一人でいる。これまたベタだ。ちなみに父は俺が生まれる前に亡くなったらしい。事故だったらしいと聞いている。

朝食はパンとコーヒー、目玉焼き。よし、普通。一人暮らしの朝はだいたいこんなもんだ。そして朝のニュースチェック。特にこの辺の名前が出たら要チェックだ。

...

まあいつも通り平和だった。ニュースからは異世界には行けないらしい。

仕方ないのでテレビを消し、朝食を片付けていると

「優ー!!」

迎えが来たらしい。俺は急いで家を出る。カギは閉めた。大事。「優、おはよー!」

歩きながら説明しよう。彼女は彩果。一人暮らしの俺を気遣ってか、朝はだいたいこいつが迎えに来る。

何を隠そうこいつは『家が隣の美少女幼馴染で社交的』という最強の属性を持っている。ラノベにはかかせないな!ちなみに胸は残念ながr「馬鹿にされてる気がするの!」
「気のせい?」

やはりこういうところは敏感である。異世界に行くなら是非とも連れていきたい。

学校への通学路は最高の異世界スポットである。曲がり角だの他の学生だの、要素に満ち溢れている。もちろん彩果とて例外ではない。会話は異世界への種だ。(自論)

異世界異世界と言っているが、異世界にもいろいろある。魔法が使えたり日本ではなくなったり、果ては自分の姿が変わったり、と。要望もなくはないが、あまり問わない。ラノベの世界であれば俺は大満足だ。厳選なんて何千

年あつても足りやしないしな！

「また異世界のこと考えてるでしょ」

「俺はいつでも頭には無数のルートがあるからな。見逃したらせつかくのチャンスが無駄になるだろう？」

「変わらないね。もし本当に行けたらこっちの優はどうなるの？」

「きつと時間が止まるか存在ごと消されるから大丈夫だろ」

「そうだといいけどね」

「まてなんだ今の答え方。引つかかるだろ。おい。」

まだまだ俺の異世界ライフは始まらないらしい。

第2話

学校でも俺の異世界搜索ライフは続く。

クラスは2-A。なんとも異世界じゃないか。Aクラス最高。

「おい優、誰と話してるんだ？」

こいつの名前は真翔。俺の中学からの友人だ。サッカー部のエースであり、容姿はさわやかイケメンそのものである。ああ、要素全開。

「俺らの外の世界に、かな。え、待つて引かないで。」

「いつものことだからもう慣れたけどな。そういえば昨日のサッカーみたか？」

「もち。試合終了間際の中田のボレー、あれは痺れたわ」

「だよな！あんなの俺もやってみたいんだけどな」

「プロの練習量からして俺らにやまだまだだなきつと」

「そうだよなあああ」「ういー、HRやるぞー」

真翔と別れて席に戻ると、昨日までなかった机と椅子が。これはもしや!!

「学校からの連絡は特になし。だがーつ。今日から、転校生が来ることになった。自己紹介よろしく」

「初めまして、田辺真花です。よろしくお願いします」

美少女！金髪！！笑顔のオーラ！！ラノベフラグ建設あああああ！！！！

「席は後ろの空いてるところに行ってくれ」「はい」

待ってろラノベ界、俺が殴り込みに行つてやる！！

「お隣同士よろしくね」

「おう、俺は森畑優。ゆうでいいぞ。よろしく。」

「優くんだね！私は真花でよろしく」

隣の天使の微笑み、これはもう確定なのでは!?

「真花、だよな?」「ん?ん!?真翔!?!」

あれ、この二人接点あったの?しかもかなり親しげな感じはするが

「久しぶりじゃんか。小4以来だな!」

「また会えてうれしいよ真翔!よろしく!」

あー: : これはなんとなくわかった気がするが、一応。

「二人仲良さそうだけど知り合いなのか?」

「そうなんだよ、真花は俺の初めてできた友達なんだよ!」

「小4の時にお母さんの都合でちよつとだけ海外行っちゃったから離れ離れになっちゃったけど、まさか真翔会えるなんてね!」

「それにしてもかなり感じ変わったよな。前はもつと根くら「真翔、ちよつと来て」ん？ ああ。」

なんで止めた？え？すごい早さだったよ今。真翔すごい顔してるよ？え？

「優くん、これからもよろしくね！」

「あ、ああよろしく。」

そういうと真花さんは他の女子に囲まれる。大変だなあ。

「真翔、何話してたんだ？」

「いや、何でもないぞ。本当に。頼む信じてくれ。」

「お、おう……？ 分かった」

あの天使には何か秘密があるらしい。だが俺がそれを知るのはまだ先になりそうだ。まだまだ俺の異世界ライフは始まらないらしい。

第3話

放課後も俺の異世界搜索ライフは続く。もちろん要素は盛沢山。

今日来た転校生（天使）と友人（イケメン）と幼馴染（一応美少女。貧乳だが。）と商店街へ。

なんとも現実味のない展開か。最高。

「気のせいかもしれないけど私のこと馬鹿にした？」

「君のような勘のいいg「したのね？」気のせいだって気のせい」

「そう、まあいいけど。」一難を去った。俺最強。

「ん？」おっと危ない。

「優はおもしろいね。一緒にいて楽しい。」

「そうか？ありがとな。」ああ、天使が笑ってる。これが見れるんなら何でもできる。やる。

「ところ真花、なんで突然戻ってきたんだ？親の仕事とか言ってたけど。」

「それ私も気になってた！どうして日本に戻ってきたの？」

「あつ、それは：えと：」真花の顔がだんだん赤くなつて、あつ。そーゆーことか。

「まあ深くは聞かないでもいいんじゃないやね？話したくなければ話すつて感じだし」

「そうだな、いつか聞かせてくれよ」「そうだね、これからも仲良くしようね」

「っ！はいっ！」赤い頬、万遍の笑み。ああ、生きててよかつた。

彩果と真翔が話しているのを見ていると横から裾を引つ張られた。なにそれ可愛い
かよ（）

「ざつきはありがとう。ほんとにありがとう！」小声ながらも気持ちをよく伝わってくる。てか耳溶けそう。

「なんか言いにくそうな感じだったし、無理に聞くことでもないしな」

「何話してたの？」

「いや、何でもないよ。それより真花さんの家つてどの辺なの？」

「それが、荷物だけ先に届けてもらつてて私も良く分かんなくて。地図は持つてるんだけど」

「じゃあみんな探してみよつか。私と優の家もこの辺だから」

「そうなんですか!？」

「おいおい俺だけ仲間外れかよ」

「まずお前は電車通学だし近所になることは難しいだろ」

「そうだけどなんだかなあ」

「大丈夫。みんなで遊び行つてあげるから」

「真翔の家も行つてみたい！」

「お？そうか。なら許そう」

「隣駅だから15分もかかんないけどな」

地図の通りに歩き進める。違和感はあるが気のせいだろう。

「ここを曲がつて、ここはまつすぐ。それでその角を曲がつた2つ目の家。なるほど。」

「ん？」 目的地の前に立ち俺は真花と同時に声を上げた。いや、だつてそこは、

「俺（優）の家じゃねーか（じゃん）!!」

「え？え?! いやでもたしかにここになつてるし」

「間違いなく優の家だなこれ」

「まてまてそもそも俺一人暮らしだし今日の朝までなんも音沙汰なかつたぞ」

「荷物持つてきてる様子なんてなかつたよね!？」

「とりあえず、行つてみないか？」

家に戻るとそこには確かに山のような段ボールと一通の手紙が残されていた。

『優へ 仕事先で素敵な人見つけちゃつて結婚しました！その人の子が日本に行く高校生みたいだったからうちに住んでもらうことにしました！女の子です！仲良くしてあげてね！あと帰るのはまだ先になりそうです。ごゆっくり！ お母さんより』

どうやら俺の異世界ライフが始まるかもしれない。

第4話

「。。。」

「えーっと、あはは。..」

「うちの親が申し訳ない。..」

「いえ!!それに、私の親でもあるらしい、ので、えへへ。..」

荷物を空き部屋に運び入れ、4人でリビングに集まっている。なんだこの状況は。

「いったん状況整理しようか。うちの親と真花さんの親が結婚することになって、真花さんの家は売り払ってたから日本での家が僕のうちになって」

「今の二人は家族である、ってわけだな」「まだ仮だからな。真花さんの確認次第だから。」

「なんなのこれ」こつちが言いたいわ。なんだよこれ(言った)。

「今お父さんに確認してみたけど、間違ってるみたい」

「じゃあほんとに」

「家族、なんだな(なのね)」「 \backslash / \backslash / \backslash 」

「優、よかったじゃない。こんな美少女と暮らせるなんて」

「からかつてる場合じゃないだろ。真花さん、大丈夫？」

「・・・」

「「？」」

「あ、いえ、その、学校初日に仲良くなった隣の席の人が家族になって、二人で暮らすなんて、ほんとに現実なのかな、って」

「俺もほとんど同じこと思ってるよ。頬でもつねつてみるか？」

「えっ」そういつて真花さんの頬をやさしく引つ張る。

「あうあう………夢ではないんですね」

「大丈夫、ここにいるみんな同じこと思ってるから」

「それで優、どうすんだ？さすがに二人暮らしとなると結構変わってくるだろいろいろと」

「最低限生活はできるけど、心の面が大きいかもしれない」

「あんたまだ女の子と付き合うことすらしてないもんね」

「言わなくていいだろ。!!」「確かにその点じゃ安心だな」

「真翔まで」

「ふふっ」

「!?」

「安心できるなって、そう思ったんです、優さんなら」

「一応男だからな？」

「それでも、ですっ」

「随分と信用されてるじゃねえか優よ」

「この短期間でなにかあったの？」

「いや、別に何も」「何でもないよっ！」

「ちよつと」「失礼」

「?」

そう言つて二人が部屋を出る。

Aside

「絶対あの二人なんかあつたよな？」

「さっきの帰り道仲良さそうだったもんね」

「昔はあんなに明るくはなかつたし成長してはいるんだよな」

「真花さんの昔、気になつてたんだよね。どんな感じだったの？」

「いや、あいつに口止めされてるからそれは、な」

「それじゃ仕方ないね。戻ろっか」そうして部屋のドアを開けると・・・

B s i d e

「なんなんだろうねあの二人」

「不思議だったね」

「でも確かに、なんでそんな俺に安心できるんだ？まあうれしくはあるんだけどな」

「んーと、似た感じがするんだよね、優くん私つて。だからなんだと思う」

「どこがそんな似てるんだろうな」「わかんない！」そんな笑顔するなつて惚れるだろ。

「お茶、入れてくる」そういつて照れ隠しするように立ち上がる。

「私も手伝つ、あつ」「危なっ…!!」その瞬間世界がスローモーションになった。

倒れてくる真花さんを受け止めようと抱きとめる、が思いのほか地面に摩擦がなかった。

ガチャツ

「おまたs…え」「わりい待たせ…は?」「ツ…:/:/」

説明しよう。俺は真花さんを助けるのは成功した。だがその体勢が、完全にまずい。俺が真花さん押し倒してる。あー、まずい。

「違うんだ、待ってくれ」

「何してんのよっつ!!」

その瞬間、季節外れの紅葉が咲いた。

第5話

二人を駅まで見送り、家まで帰る。

彩果はいてくれると思っていたがテニスの練習があるらしく今日は家に帰るのは遅くなるらしい。今日ほど一緒にいてほしいと思ったことはない。

やはり、きまずい。

「俺たちって、家族、なんだよな」

「そう、みたいですね、あはは…」

「・・・よし」

「？」

「今日この時から俺たちは家族、そうだよね？」

「はっ、はいっ！」

「じゃあ敬語は無し。俺は真花って呼ぶから真花は俺のこと優って呼ぶ。いい？」

「わっ、わかりまし、っ！わかった！」

「じゃあ、帰るか真花、我が家に。」

「そうだね、帰ろっか、優！」

二人で並んで帰路を歩く。

「… やっぱり優しいね、優は」

「いや、普通だつて」

「ん!?聞こえてたの!?!」

「そりゃまあ」空耳系主人公なんて死ぬほどいるからな。俺はあんなにはならん。

「ツ…!! / 帰るよ!!」 ああ、やっぱ可愛い。

家に帰り、時計を確認。19時を回っていた。

いつもならゲームに興じるのだがさすがに今日はお預けだ。

毎日ログイン? 天使に比べりゃ安いもんだろ。

まああの天使は部屋の片づけで手一杯なんだがな。やけに小さいのがいくつかあつたし、貴重品もあるんだろきつと。ここはひとつ、かつこいとこ見せないとな。

そう思い、キッチンに立つ。男子なのにな?と思うかもしれないが、今は料理男子が持

てる時代だ。これまめな？

弁当ぐらいなら普通に作れるぐらいじゃないと。だがあまり頑張りすぎるのは今後に響くから、簡単なものにしてよう。

材料は、卵、鶏肉、玉ねぎ、ピーマン、パプリカ。俗にいう余りものだ。

予想がついてるかとは思うが、そう、オムライスである。

卵料理が好きと前情報は得ているのでいつも通り作っていく。

ケチャップで文字を書く、なんてのはカップルとメイド喫茶の特権だ。たべれりや何でもいい。

配膳を終えて真花を呼ぶが返事はなかった。

まあ二階だし片付け中だし仕方ないか。

なぜ一人暮らしで二階建てかって？そんな俺も知らん。ご都合主義さ。(メタア)
「真花、飯できたぞ？」ノックするのは大事。どこぞのえちえち主人公のようにはならん。

「優!? あゝ つゝゝ!! ちよつと待ってて! すぐ行くから!」

「おう、じゃ先にしたいるぞ」

とんでもない声が聞こえた気がした。服でもやってたんだろうか。ごめんな真花。

下に降りてきた真花は少し元気がない。やっぱりきつききの声と関係があるのだろうか

か。

「大丈夫か？」

「うん：！大丈夫だいじよ：。 オムライス!? 優って料理できたの!!」

「曲がりなりにも一人暮らしやってるから一応な」嘘である。()

「まあ冷めるのももつたないし、食べようぜ」

「いただきます」

目の前の真花が俺の作った料理を：。うれしすぎる。

「おいしい！すごいよ！」

「こんなのでよければいつでも作るぞ？」

「ほんとに!? うれしい!!」

おうおう近いですよ嬢さん心臓がbpm180で連打してるよ危ないって。

「でもそれだけだと申し訳ないし：。じゃあ朝ごはんは私が作る！」

「え、いいの？」

「一緒に住むんだし、それぐらいやらせて」

「わかった。じゃあお願いしようかな」

「うん！頑張るね!!」

・・・美少女と一つ屋根の下で暮らし、朝ごはんを作ってもらえる。

あー、もうこれ普通じゃないっぽい。うん。ラノベだったのかな、俺の人生。
(完)：？

第6話

幸せに終わる、そんな人生もいいじゃないか。人生波が立たないなんて最高じゃないか。波乱万丈より平々凡々でいいじゃないか。

そう思ってた時期が俺にもありました。すべては同居二日目のこと……。

前日は同じ家に天使がいるってだけでほとんど寝れなく、目が覚めたのは朝5時。朝のラジオ体操すらやってない早朝だ。

せつかくの土曜日なのにこんなに早く目が覚めるなんて…… 人生損した。

とりあえず散歩でもと思い着替えて外に出る。

するとポストに真花宛の封筒が届いていた。

二日目の人間宛で来るってありえるのか……？ そう思いつつも散歩に出かける。

「おお、優じゃん」背後から声をかけられる。

「なんだ将也じゃん。ランニングか？」

「そんなとこ」

彼は俺と真翔と同じサッカー部の将也。身長は190あるとかないとか。羨ましい。

「優はこんな朝早くから何してんだ？」

「散歩、だと思う」

「…？ 謎いな。まあ俺行くわ」

「おう、頑張れよ」

将也を見送って近くの公園まで足を運ぶ。

この公園は俺が初めて異世界に行けると感じた場所である。

良く分からんオブジェや遊具、当たり前だがベンチもあり、どこでイベントが起こる

かワクワクする楽しさがあった。

ここ2日は現実離れすぎて感じていなかったが、やはり異世界には夢や希望がある。

そんなとこに行けるかもしれないと思うだけでテンションが上がってしまう。

相変わらずの厨二病だが関係ない。

15分ほどしてから家に帰る。今は6時10分。

家に入るとコーヒートパンのいい香りが漂っていた。

「あっ！ 優いた!!」

朝から天使が待っていた。しかもエプロン姿で。Happinessはここにあるん

だね。ハハッ（某鼠）

「おはよ、ちよつと外歩いてた」

「部屋見ていないからびつくりしちやつた。朝ごはんちようど出来たとこ」

「まじか、ありがと。あと真花宛に手紙来てたぞ」

「え？」ポストにあつた手紙を渡すと目を見開きこつちを見てくる。

「見てないよね？」

「（裏に書いてあつた宛名は）少しだけ見たけどまずかつたか？」

「…!?え、あー、うん分かつた。先にリビング行つてて」

そういうと部屋まで急ぎ足で戻つていった。心なしか顔も赤い。

勝手に封開けたのはさすがにまずいよな…中は見てないけど。

後でしつかり謝らないと。

「いただきます」

朝食はトーストに目玉焼き、ベーコン、サラダというスタンダードなメニューだがこれがうれしい。

「美少女が作つた」は「一流シェフ」よりも強い（確信）。

「それでね、さっきのことなんだけど…」ああ、手紙の件か。

「どうかしたんだ？」

「誰にも言わないでほしい、かな」

手紙が届いたってことをか？まあ言わないだろ。

「大丈夫。誰にも言わないよ」

「よかった。。。よしっ」

真花は朝食を食べ終え、食器を流しに持っていき、部屋に戻っていった。

俺も食器を片付けていると部屋から戻ってきた真花が、なぜか部屋から持ってきていたパソコンを開いている。

「あの。。。実は私。。。」赤面させながら恐る恐るパソコンの画面を俺のほうに向ける。

（手紙と関係しているのか。。。？）そう思いパソコンの画面を見る。

すると。。。。

え？

ん??

「えーっと、これは？」

明らかに高校生が書いてはいけなような過激な絵が目の前に。

きつと変なページに飛んでしまったんだろう。天使がまさかこんな…

「私、18禁同人誌作家兼絵師なんです…!!」

この告白とともに日常が崩れ去る音がした。あれ、普通ってなんだっけ。

第7話

「私、18禁同人誌作家兼絵師なんです…!!」

顔を赤らめ、目を閉じている彼女からのこの告白。

「えーっと、ごめん、展開が早すぎて理解できてないんだけど…」

これが精いっぱいの本音である。脳がフル回転した結果だ。異論は認める。

「マンガ家で絵を描く人、ってことでいい？のかな？」

「マンガじゃない！同人誌!!ぜんっぜん違うから!!」

いや、どう見てもマンガなんだが… ええ…

「あああ、こんなに早くバレるなんて。隠せてると思ってただけだなあ」

「いや、知らなかったよ？なんなら今一番驚いてるよ。キャラ違うし」

「さすがに隠す必要もうないでしょ。手紙見られたんだし、もういいかなって」

「…一応さつき言っただけ、手紙の中は見えないからな？」

「…え？」

「いや、さすがに勝手に中見るのはまずいからな」

「でもさつき手紙見たって!!」

「あれは宛名が知らないところからだっただし真花宛ってわかったから中は見ずにやめたんだよ。見たのは宛名だけ」

「っ…!!!／／／ 紛らわしいのよ!!!」

「ごめんって!さつき言おうと思っただらカミングアウトされちゃったから言い出せなくて」

「これじゃ私が勝手に秘密暴露して自爆しただけじゃない!!」

「そりゃ… そうなんですよねえ… ごめん。ごめん。」

「じゃあ俺も1つ隠してたこと言うから!それでおあいこってことにしてくれないかな…?」

「まあ、内容によるけど。てか相当のこと言わないと許さないから!!」

赤面した真花から離れ、自分の部屋からあるものを持つてくる。

「これ、なんだけど…」

「ただのノート?馬鹿にしてる?」

「中見ろって!」

不審がりながらページを開く。

「あんたつwこれつてww」

進化が笑うのも仕方ない。この本は俺が書いた『Load to Another World』という初めて本気で異世界を研究した本なのである。いわば黒歴史だ。

「相当なもん出しただろ！これあんまみせたくないんだからな！恥ずいし。」

「そりゃ他の人には見せられないよねこれはww」

今の自分は先ほどに真花同等の赤面に違いない。

「あーw笑つた笑つたw いやよ、これでおあいこね」

「… 助かる。」

「あとこれは二人だけの秘密だから！いい?!」

「当たり前だろ誰が伝えるかこんなこと!!」

「じゃあそーゆーことで」

返してもらった黒歴史本をすぐさま封印しに行く。なぜ捨てないかって？捨てると
きにバレたくないし。怖い。

「引越しの時の小さい荷物ってもしかして」

「ああ、仕事道具だよ。てかさっき突然声かけたから端末落としかけたんだからね!!」
「ノックはしたんだけどなあ…」

今日分かったこと、うちに住んでいるのは天使ではなく、欲望まみれの頭ピンクなJ
Kだった。

まだまだ俺の異世界ライフは始まらないらしい。

第8話

休みの日でも俺の異世界搜索ライフは続く。(この入り懐かしい)

昨日(前話)のカミングアウトで真花の本性が見えたためか、同居について今までのようなココロオドルようなことはないようだ。

「ゆう〜!!みてみて!!この角度さいつつこうじゃない!!」「ゆう〜!ごはん〜!!」「ゆう〜!」

注文が多い!主に今までなかった場面で!!休みがない!休みなのに!!()
今までの俺だったら(こんな天使と過ごせるならどんなブラック企業でも就職します)とか思ってたんだらう。

本性を知った今ではさすがにつらい。18禁の世界なんて俺に聞かれても(男の恥)
今まで気楽に生きていた日曜日は、一転して慌ただしい頭ピンクなJKがいるドタバタ劇へと進化した(やったね。)

ただ俺にもやることがある。

「真花ー、ちよつと外出てくるからー!」

そういつて荷物を持ち、ある場所へと向かう。

向かった先はライブハウス。

中には真翔、将也。現在時刻、15:45。

将「遅いぞ優ー、今日は3時集合だろ」

優「すまん同居人がうるさくてな」

真「なんでもう一線超えたのか？お早いもんだなあ」

優「違えよ！わからんと思うがめんどいんだよ！」

将「わかったわかったって。早く準備してこい」

そんなお小言を言われつつも準備をする。

背負ってきたあるものをケースから準備をする黒く光るボディをしたそれは中学生の時から俺の御供、そう、ギターだ。

正確にはベースギターだ。名前は「柚子胡椒」。

ネーミングセンスは当時のものだが、実際気に入っている。

サツカー部所属の3人だがもう一つ、バンドを組んでいる。

メンバーを紹介するぜ！ギターボーカル！真翔！！ベース！優！！ドラム！将也！！今日
はありがとなああああ！！！！

……コホン。一旦落ち着こう（いきなりどうした）

この3人は1年生のころからバンドを組んで活動している。

きつかけは将也の「楽器出来る男って格好よくね？」の一言である。

将也はもともとギターを弾いていて、親は元プロバンドマンらしい。

真翔は高校デビューを期にドラムを叩き始めた。

この三人で高校性の夏ごろにバンドを結成した。

曲はオリジナル。作詞は将也、作曲は俺がしている。

チューニングを済ませて二人の元に戻る。

将「じゃあ始めるか」

優・真「おう」

ドラムスティックの4カウントから全員で演奏が始まる。

3時間後、一通りの練習を終え、切り上げる。

将「この後時間あったらどっかで飯食ってかないか？」

真「おお、ありあり。優は？」

俺「悪い、同居人が」

将「同居人ってあの転校生だろ？ 運命じゃね？」

真「俺の幼馴染と運命とかやば。同人誌かよ」

俺「んなことねえよ。正直出会いはそうかと思っただけど、絶対違う」

将「そんな言うか？」

真「もしかして、もう出したのかあいつ」

将「ん？ 何がだ？」

真「いや、なんでもない」

俺「多分そうだと思う」

真「あんま外でそれ言うなよ。あいつのために」

俺「おう、わかった」将「なんだよ教えてくれよお」

真「まあいつか分かるよ」

俺「いつかな」そういつつライブハウスを後にする。

「あ」

将也が声を上げる。

将「今から優の家行けばいいんじゃないかね？何なら飯づくりも手伝うし。優と同居人さえよければ」

真「ああ、確かに」

俺「じゃあ買物してからでもいいか？一応真花にも聞いてみる」

そういつて電話をかける。

「もしもし真花、俺だけど、今日の夕飯真翔と俺の友達一人来るけど、大丈夫か？」

「え、片づけてないんだけど」

「買物してから帰るからそこは大丈夫だと思うが。何かリクエストあるか？」

「お任せでいいよ。私は片付けしてるから。それじゃ」

よほど散らかっていたのだろう、高速で切られた。

俺「大丈夫だとき。ご飯もお任せでって」

将「魚食べてえ」

真「俺も。でも生はパスで」

俺「それじゃ焼くか」将・真「賛成」

そんなこんなで商店街に向かう。今日は鮭のカマとかアユの塩焼きなんかも良さげだ。

そうおもいつつ歩いていると向かいから彩果が歩いてくる。

真「彩果じゃん、部活帰り？」

彩「やっと終わったところ！みんなはどっか行くの？」

将「これから優の家で飯なんだけど」

彩「私も行っていい?？」

俺「わかった、一人追加な。真花に伝えてもらえるか？」

彩「りよーかい！」

食材を買い終え家に帰る。

「おかえり！皆さんいらっしやい！」

「ただいま」

わお、天使再び。おかえりを言ってくれる人がいるのっていいね！

「真花——！」

「彩果——！」

二人は熱い抱擁を交わす。なにこれ仲良っ。

真翔「お邪魔するよ〜」

俺「おうおうあがってってくれ」

3人が奥に行く中、将也が固まっている。

「将也、どうした?？」

「おい、あんな天使この世にいないのか…」

「まあすぐそこには一応」

「俺、運命感じた」

「え？」

「あの子、運命の人かもしれない」

「おうふ…」

まさかの将也、一目惚れ。圧倒的一目惚れ。まさかこんなことになるとは…

「優、行くわ。運命のもとに」将也は憑りつかれたように家にあがる。

呆然。超呆然。圧倒t…いいや。考えるのをやめよう。

思考を放棄して家に帰る。

まだまだ俺の異世界ライフはまだ始まらないらしい。

第9話

同居人との朝でも俺の異世界探索ライフは続く。

いつものように朝起きて、朝の身支度をする。今日もハンカチはポケットへ。

1階に降り、コーヒーを入れる。ついでにパンと目玉焼き、サラダをちやちやつと作る。

作り置きの中から具材を選び、とりあえず卵焼きを焼いて、弁当に詰める。

二人分だと作るペースが落ちてしまうと考えがちだが、意外とそうでもない。

ここまで来て1つ、気づいたことがある。

『真花、起きてるのか…？』

急いで2階へ上がり、ドアをノックする。

「…何？」

「いや、もう朝飯だぞ？」

「いまちよつと忙しいから1時間待って」

「いや学校遅れるだろ」

「…今何時？」

「7時半」

「?!?!すぐ降りるから待ってて!」

これは寝てたのか、それとも起きていたのか微妙なラインだった。

一旦下に降り、二人分の朝飯を盛りつけてテレビをつける。

まあいつもの通り自分には関係ないことばかりであった。やはりうまくは行かない。

そんなことをやっているとき真花が下りてきた。

「おはよう優、朝ごはんごめんね」

「全然大丈夫だけど、朝から何してたの？」

「朝からというか、夜からというか…」もぐもぐ。

まさかの昨日から寝てなかったらしい。

「そんな遅くまでやることだったのか？」

「急にイメージ湧いちゃって今すぐ書かないと間に合わないと思っちゃって」

「今までもずっと夜遅かったのか？」

「だいたい一人だったから自由にやってたよ」

一人、ね。

「週末は予定あるのか？」

「ん、将也君と映画見てくるけど？」…あれ？

ん？

「将也と仲良かったんだな」

「たまたま趣味合っちゃってね、ほら」

そういつてRAINのトーク履歴を見せてくる。

『週末の映画楽しみにしとくよ！今から知識つけとく!!』

あー…なるほどね。俺への返信は『り』『かしこ』『パス』ぐらいなのにねえ。

「将也君つてアニメ結構見てるんだね、意外」

「おう… そうだな意外だな」

もともとあいつはアニメなんか見ない、時間があればサッカー海外中継を連続して見る奴だ。女ができる人と人が変わるって本当だったんだな…

「週末何かやろうとしてた？」

「あ、それは」ピンポン

「彩果だな、そろそろ行くか」

「そだね、なんか言いかけてたけど？」

「特に何でもないから気にしないでくれ」

「??うん」

「こーゆー展開は苦手だ、だいたいがバレてしまう。俺の嘘はすぐわかるらしい（彩果談）。

まあ今回は要件も場所も言っていないから大丈夫だとは思うが。

「真花！おはよー!!」

「彩もおはよー!!」

朝から熱い抱擁を交わす二人を尻目に家を出る。

そんな朝的一幕。

第10話

学校の帰り道でも俺の異世界搜索ライフは続く。

今日は夕飯の買い物しながらなので一人での帰宅である。寂しくなんか無い。これが普通。……普通だったら普通。

現在午後4時、タイムセール開始時間は6時前後なのでそれまで少し時間つぶしのためにカフェに入る。

家と学校の代替半分地点ぐらいにあるためほぼ常連になりつつある。

ドアを開けてカウンターでコーヒーを注文する。

ちなみにブラック派である。

空き席を探していると見覚えのある人を見つけた。

優「瞬ちゃん、今日も通ってるな」

瞬「よ、もちろん常連だからな」

彼は同クラスの瞬、家は逆方向であるがここに通うのには理由がある。

店員さん「こちらコーヒーでございます、ご予約くりどうぞ。瞬君、おかわりいる？」

瞬「じゃあよろしくしようかな」

店員さん「はい！」

彼女に会うためである。名前は万希さん、学校は違うが同学年の女性である。

この二人はお互いに好意を持っているがあと一歩踏み出せずにいるという状態が続いている。とてももどかしい。

優「んで、告白した？」

瞬「いやいやできないって」

優「早く付き合えよな」

瞬「ここまですぐ一通りの流れ。」

瞬「今日は一人なのか？」

優「夕飯の買い物しがてらだからな」

瞬「なるほどな、自炊って大変なのか？」

優「慣れれば生活の一部みたいになるから大丈夫だけど最初はしんどかった。料理好きじゃなかったら心やられてたかもしれない。」

瞬「始めてみようとは思えない感想だな、自炊はまだしないでおくら」

優「でも料理男子はモテるぞ」

瞬「そうか、よしやる」

万「なになにく？」

優「瞬が手料理作るらしいよ」

万「ほんとに!?!行きたい!!」

瞬「ある程度できるようになったら、でいい？」

万「もちろん!待ってるね!」

瞬「そういつてカウンターへ戻って行く。」

瞬「優、さんきゅ。それと、お願いがある」

優「… 食材買い行くか？」

瞬「頼む。あと教えてくれ」

優「モテ料理か?さすがにしんどいぞいろいろ」

瞬「家庭科レベルで頼む。」

優「簡単なやつな、男ってパスタ茹でときやなんとかなるんじゃないかね?」

瞬「え、そーゆーもんなの」

優「自炊男子飯なんて1パスタ2チャーハン3カレーみたいなもんだろきつと、簡単だし。そこから野菜増やしてバランスとか色合いか気にしていけば十分だと思うぞ」

瞬「レシピ見ながらもなぜかできないんだよな、パスタは泡吹くしチャーハンはベ

ちやべちやだし」

優 「じゃあほんとに基本からだな、副菜とかもいくつかやらないとな」

瞬 「神かよ頼む」

その後いくらか雑談をして店を出て二人でスーパーに向かった。

これからの戦いに向けて士気を高める。ここで言っておく。

タイムセールは、現代の戦である。

第11話

「な……なんだよこれ……ちが……話と違うじゃねえかよ……

俺は……ただ……」

目の前に広がる光景に絶望の感情がとめどなくあふれてくる。

大勢で群れを成し獲物を奪い合うその光景はまさにサバンナの荒野そのものである。

自分とて例外ではない。

獲物がなければ何もできない。

ただ待つことしかできない自分に愚かさを覚える。

この中に入ったとしたら間違いなく食われる。

弱きものは刈り取られる。それが自然界の摂理である。

この世に希望なんてあるのだろうか、きつとこの世界は……

瞬「優……忘れない。絶対に……」

優 「何シリアス調にしてんだよ」

瞬 「いや、タイムセールってこんなに人多いと思つてなくて。正直怖い。」

優 「だから言つたら、戦だつて」

瞬 「甘く見てた」

優 「まあお目当てのものは十分買えたから良かったけどな」

スーパーからの帰り道でそんな会話をしながら優の家に向かう。

優の買い出しを手伝い、そのうえで俺の特訓用の食材も追加で買うことになつてい
た。

メニューは優と考え、『オムライス、サラダ、野菜スープ』の3種になつた。

理由は簡単かつ料理できそう感が出るから。

あと、こんな料理を作つてほしいから（願望）。

スーパーに行き、野菜は俺が、その他は優が買いに行つたんだが、なめていた。

買い物ぐらい一人でも行けると思っていたが、まさに戦そのものだった。

主に主婦の集まり方が意味わからない。

3秒前まで後ろにいたはずの人が目の前にいたり、食材とつてきただけの人が息切れてたりetc.:. 忍者ですかってレベルで集まつた。

これ一人でするようになるのいつ頃になるんだろう.:. 定価で買うのもなんだかな(節約根性)。

真花「優おかえり、つとこんにちは?」

瞬「こんにちは?」

優「紹介してなかったか。こいつは今いろいろあつて一緒に住んでる真花。こっちは俺のクラスメイトの瞬だ」

瞬「よろしくな」

真花「瞬くんね、よろしく!あと、買い物ありがとね」

優「今日は瞬と夕飯作るからちよい時間かかると思うぞ」

真花「??わかった。部屋にいるね」

そういつて真花さんは二階へ上つていった。

瞬「…許嫁？」

優「違う。絶対違う。」

瞬「ふーん？」

かなーり疑問はあつたが優からの説明で何とか理解はした。納得はしてない。

こんな美少女と家で二人？は？小説かよ（○）

まあいいか。今日は料理教室だし変なこと言つて教えないなんてことになったら意味がない。飲み込もう、いつかいじり倒すけど。

優「んじやオムライスから作るか。まずは玉ねぎの皮むいてみじん切りにしてくれ
それぐらいはできる。皮むくだけだし。玉ねぎの皮つて白いんだな（○）

優「あれ、え？」

なに絶望した顔してんだよ、できてるだろ？

瞬がオムライスを作るのに3日かかったらしい。
結果は大成功とのこと。

しかしのちに二人はこう語った。

優・真「卵料理、コワイ…」と。

第12話

幼馴染とでも俺の異世界搜索ライフは続く。

今日は真花が学校の友人と遊びに行くとのことで、家に一人。のはずだったが…

彩「パンケーキ食いたいパンケーキ食いたい…」

某芸人さんのようなことをつぶやき続ける幼馴染がいた。

「…なんで？」

彩「なんかすごい見つけちゃってさ」

そういつて「Youstagram」の画面をみせてくる。

そこにはあの有名な絵本『ぐ〇と〇ら』に出てきそうなパンケーキがあつた。はちみつたつぷりのおおきなおおきなパンケーキである。

「甘そう…」

彩「そりゃパンケーキだもん。甘くないとじゃない？」

俺は女子が好むようなことで甘いものは得意ではない。甘党さんとはどうも気が合わなそうである。

彩「優って甘いのが苦手だっけ？」

「好んで甘いものはあんま食べないかな。甘いより辛いほうが好き」

彩 「辛党ってやつ？」

「辛党って辛い物が好きな人じゃないかな？」

彩 「え、違うの？」

「よくある間違いだが、辛党ってのはお酒が好きなお酒が好きな人のことだぞ」

彩 「じゃあ誤用なの？」

「辞書的な意味だからあまり気にしなくてもいいと思うけどな。潮時とか失笑とかみたくに誤用のほうが出回ること多いし」

彩 「違和感感じないから私も間違って使ってそう」

「知っというて損はないから知識としてあるのはいいかもな」

彩 「そだね〜」

……あれ？何の話してたっけ？

彩 「頭使ったら当然補給しなきゃ。パンケーキなんていかが？」 そうだったパンケーキだ。

「じゃあ食べに行くか」

彩「いいの!?無理してない?」

「この店はクッキーの種類が豊富だし一度は行ってみたかったんだよ」

彩「じゃあ決まり!急いで支度しないと!」

彩に急かされるままに支度を終え、家を出る。

お店は2駅先であまり遠くはないのでホームページを見ながら移動していたら案外すぐに着いた。

店員「いらつしやいませ。2名様です。ご案内します」

木造がおしゃれな店内を見渡しながら席へと歩く。

あたりに男子の姿はほとんどない。

かわりにスイーツをお供にガールズトークに花咲かせる中高生が多い。
正直気まづいが気にすることはない。

彩「はちみつたっぷりふわふわパンケーキとあったかい紅茶を」

「季節のクッキーとホットのブレンドコーヒーお願いします」

注文を確認し、店員さんがオーダーを伝える。

彩「クッキーとコーヒーって、おなかすかない？」

「意外とコーヒーって満腹感得られるんだよ、俺だけかもだけど」

彩「それ健康に悪そうだけど」

「砂糖飲むぐらい入ってるもの食べてる人に言われたくはないんだけど？」

彩「日ごろ運動はバッチリしてるから今日ぐらい大丈夫だよ、きつと、多分、おそろく、い、」

おつと、女の子にこの手の話題を振ると危険であった。

あまり変わって見えないはずなのに急変したかのような絶望顔をしだす人も少なくはない。

その点彩果は常日頃から運動を欠かさず行っているので全く関係ない。
良くも悪くも体に肉が付きにくい体質なのである。

……ごめんそんな蔑んだ目で見ないでつらい。

店員「お待たせしまし…… た？」

優「ああ、ありがとうございます」ごめんなさい店員さん悪いのは俺です……

ブレンドコーヒーのピターな香りや目を奪われる大きなパンケーキがテーブルに並ぶ。

こんなにでかいの？フライパンいっぱい焼いたぐらいになってる。
でつか・・・（語彙力）。

正面むいてみると熱心に画角を考え写真を撮る女子が一人。すごいなあ。

「Youstaに載せないだもん。きれいに撮りたいし。優は撮らないの？」

「思い出にはなるけど写真撮るまでのこととは思わないんだよな」

「男女の違いってこーゆーとこなのかな。優は女の子寄りな気もするけど」

「よく言われるけど行動だけな。一応男だし。」

「わかってるよー」

そういつて。パンケーキを口いっぱいほおばる

「んんんん！ふわっふわ!!それに甘い!!」目がキラツキラになった。ほんとに旨いんだろ。うな。

「優も食べる?」

そう言つて一口大に切つたパンケーキを目の前に持つてくる。

・・・

「俺そんな甘いので意じゃないし」

「えー、こんなおいしいのに…。」

なんか可哀そうになってきた。でも…

「あ、もしかしてフオーク気にしてた？」

にやにやしながらもう一度持つてくる。

「からかつてんじゃねーよ」目の前のパンケーキを口に入れこむ。

うん、甘い。あつつつまい。

口直しも込めてコーヒーを飲む。苦みと酸味のバランスがちょうどよく、すつきりとした味わいだった。これはリピートしたい。

…おっと？

「もしかして、照れてんのか？」

頬を朱に染めた彩果にさっきのやり返しを敢行。

「別に気にしてないしっ」

そっぽむいて紅茶を飲み始める。

こうみると、案外行動が似ている。やっぱりこいつは幼馴染なんだな。

「…なに」

「いや、何でもない」

「そういう自分の頼んだクッキーを放りこむ。」

「桜のクッキーって言ってたが、結局桜味ってなんなんだろう。」

「甘すぎず、かといつて酸味が強いわけでもない。独特な風味が後を引く、そんな味である。桜の葉っぱってこんな味なのかな？」

「これは確かに好き嫌いが分かれる味かもしれない。俺は好きだ。この店のリピートが決まった。」

「が、このレディースな雰囲気はどう立ち向かえばいいんだろう。」

「あのさ、優」

「？」

「また誘ったら一緒に来てくれる？」

「もちろん行くよ。この店の雰囲気好きだしこれからどうやって通おうか考えてたところだったし」

「……さっすが優！幼馴染は分かってるね」

「もちろんだろ、何年一緒にいると思ってるんだよ」

「それもそうだね」

「暫く談笑した後、店を出る。」

…
気づいてはいる。

第13話

『また誘ったら一緒に来てくれる?』『もちろんだろ、何年一緒にいると思ってるんだよ』
こーいうことさらつと言えちやうんですようちの幼馴染は、どう思います?

あ、あいさつ遅れました彩果です。身長156cm、誕生日は12月26日、テニス部所属の高校二年生です。好きな食べ物は卵料理で得意料理はオムライスです、ドレスタイプの。

…違う違う。

真「誰に話してるの…?私?」

彩「ごめんごめん何でもないよ」

真「それにしても優ってそんなことさらつと言えちやうんだね」

彩「正直びっくりしちゃったよ」

真「もしかして、優のこと、好き?」

彩「いやいやいや!!違う!違って…」

真「んー、じゃあ今からテストをします！」

彩「はっ、はい！」

心理テストとかかな？結構調べ尽くした感あるけど大丈夫かな？

真「朝の占いが一位でした。外に出てみたらおっきな虹が出ていました。コンビニで
の買物物の合計が777円でした。家の近くに小さな花が咲いていました。今日は何
も予定がありません。」

…
うん。

真「これから何する？」

彩「…すっごい運いい日だね」

真「誰に伝えたい？」

あー…

彩「…真花」

真「んー？」

彩「さすがに気づくって」

真「じゃあそう言うことだよ。絶対優でしょ？」

彩「今までがそうだったからってただだよきつと。だって優は何とも思っていないよきつと」

真「そーかな？あんまり行きたくないお店にわざわざついていくのかな、って」

彩「それは私が強引に連れて行っただけだし…」

真「彩ってそんなに消極的だっけ？学校とかじやもつと明るいのに。もしかして無理してる？」

彩「そーいうんじゃない！あんまり恋愛したことないし、それに仲良いとの違いってよく分かんなくって…」

真「確かにそれは難しいかもね…好きな人の前って素の姿だしづらいし…」

彩「それでいうと優の前だと私、全然なにもやってないかも。部活後とかも普通にご飯いってたりしたし」

真「え、ほんとに？」

彩「わりとしちやってるかも」

真「私の考え方なんだけど、素の姿出せる異性って信頼できると思う。わりに『頑張るぞ！』って毎回なる人って疲れちゃわない？」

彩「確かにそうかも…」彩「でも私は大変だからこそその人のことが好きになるんだ

と思う、かな」

真「価値観だねこれw」

彩「そうだねw」

ここからは雑談したり二人暮らしのこと聞いたりしたら夜に。
途中からなぜか帰ってきた優もいたけど。

なんで？

まあいつか。

彩「今日は夕飯私が作る！」

優「いや悪いつて」

彩「今日は真花にいろいろ聞いてもらったしそのお礼」

優「じゃあ手伝いぐらいは」

彩「うん！よろしく」

真「それじゃ夕飯は任せた！優も足引つ張るんじゃないよ？」

優は少し不機嫌そうな顔をしてたけどなだめるのなんていつものこと。二人でキツチンに向かう。

二人で料理なんて最近してなかったからちよつと楽しみではある。

：：：少しだけ。ほんの少しだけ。

真「：：：なーんだ、すっかり好きじゃん」